

Whitman, Walt. *Leaves of Grass*. With an Introduction by Gay Wilson Allen.
New York, The New American Library of World Literature, Inc., c1958.
430p.

- 28) Lewis, *op. cit.*, p. 42.
- 29) Whitman, "Passage to India," *op. cit.*, p. 328.
- 30) Lewis, *loc. cit.*
- 31) Lynen, *op. cit.*, p. 227.
- 32) *Ibid.*, p. 278.
- 33) *Ibid.*, p. 283.
- 34) Lewis, *op. cit.*, p. 49.
- 35) Lewis, *The Poetry of Hart Crane*, pp. 283-284.
- 36) Lewis, *The American Adam*, p. 44.
- 37) Lynen, *op. cit.*, p. 338.
- 38) Pearce, *The Continuity of American Poetry*, p. 173.
- 39) *Ibid.*, pp. 173-174.
- 40) Whitman, "One's-Self I Sing," *op. cit.*, p. 31.
- 41) Hicks, *The Great Tradition*, p. 29.

Bibliography

- The Complete Poems and Selected Letters and Prose of Hart Crane.* Edited with an Introduction and Notes by Brom Weber. Garden City, N. Y., Doubleday & Company, Inc., 1966. 302p.
- The Letters of Hart Crane 1916-1932.* Edited by Brom Weber. New York, Heritage House, C1952. 426p.
- Eliot, T. S. *Collected Poems 1909-1935.* London, Faber & Faber Limited, 1961. 191p.
- Hicks, Granville. *The Great Tradition: An Interpretation of American Literature since the Civil War.* With a New Foreword and a New Afterword by the Author. Chicago, Quadrangle Books, c1969. 333p.
- Leibowitz, Herbert A. *Hart Crane: An Introduction to the Poetry.* New York, Columbia University Press, 1968. 308p.
- Lewis, R.W.B. *The American Adam: Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century.* Chicago, The University of Chicago Press, 1959. 200p.
- . *The Poetry of Hart Crane: A Critical Study.* Princeton, N.J., Princeton University Press, 1967. 426p.
- Lynen, John F. *The Design of the Present: Essays on Time and Form in American Literature.* New Haven, Yale University Press, 1969. 456p.
- Pearce, Roy Harvey. *The Continuity of American Poetry.* Princeton, N. J., Princeton University Press, 1961. 442p.
- Quinn, Vincent. *Hart Crane.* New Haven, College and University Press, c1963. 141p.

Whitman も アメリカを讃える序でにその物質的繁栄を肯定したことは事実である。Hart Crane はアメリカの内面的価値をうたった。たとえ Brooklyn 橋が科学の勝利を象徴するとしても、それはまたアインシュタイン的宇宙の曲線による美の極致であった。その悲劇的結果にも拘わらず、Crane の方が individualism の弱さを暴露した Whitman よりは逞ましい印象を残していることは当然ではないのであろうか。

Notes

- 1) *The Complete Poems and Selected Letters and Prose of Hart Crane*, p. 263.
- 2) *The Letters of Hart Crane*, p. 67.
- 3) Leilowitz, *Hart Crane*, p. 54.
- 4) *Ibid.*, p. 224.
- 5) Lynen, *The Design of the Present*, pp. 338-339.
- 6) Crane, *op. cit.*, p. 50.
- 7) See Quinn, *Hart Crane*, pp. 81-82.
- 8) See *ibid.*, p. 82.
- 9) *Loc. cit.*
- 10) *The Complete Poems and Selected Letters and Prose of Hart Crane*, pp. 51-52.
- 11) See Quinn, *op. cit.*, p. 83.
- 12) Whitman, *Leaves of Grass*, p. 323.
- 13) Lewis, *The Poetry of Hart Crane*, pp. 261-262.
- 14) Crane, *op. cit.*, p. 50.
- 15) Whitman, *loc. cit.*
- 16) *Ibid.*, p. 325.
- 17) Crane, *op. cit.*, p. 51.
- 18) *Ibid.*, p. 48.
- 19) Whitman, *op. cit.*, p. 328.
- 20) T.S. Eliot, *Collected Poems 1909-1935*, p. 74.
- 21) Whitman, *op. cit.*, pp. 121-122.
- 22) Lewis, *The American Adam*, p. 49.
- 23) *Ibid.*, p. 48.
- 24) Whitman, "Song of Myself," *op. cit.*, pp. 66-67.
- 25) Whitman, "Out of the Cradle Endlessly Rocking," *ibid.*, p. 210.
- 26) Whitm, "Ages and Ages Returning at Intervals," *ibid.*, p. 109.
- 27) Witman, "A Noiseless Patient Spider," *ibid.*, p. 347.

興味深いものであると言いたい。

Whitman はアメリカという国が特殊な階級のためのものでなくて、多数の労働者のためのものであると言ひ、自分は正統派の Jacksonian だとも言った。そして次に来るものは、ある意味では尻ごみする点もあるが、社会主義であろうと断言している。Thoreau のような無政府主義的孤立は、国内にうずまく諸勢力を統制できないであろうとも言っている。このような政治的発言や民主主義への展望は、詩作品に次いで重要なものであることは論じるまでもない。

One's self I sing, a simple separate person,
Yet utter the word Democratic, the word En-Masse.⁴⁰⁾

この引用の2行目に「しかし」という語があるが、広義の民主主義というものの中には個人主義と平等主義という要素がある。自由と平等、個人と大衆が必ずしも調和しないままに同居することは、アングロ・サクソンの泥くささでもあり慧知でもある。Whitman は Thoreau と同じく Emerson によって、自己の裡にある神的なものを自覚した。個人主義と民主主義が対立する狭義の意味の場合もあるにしても、これは時によっては民主主義が国家毎に形態や性格を異にすることもできるように、無意識のうちに混乱を招きかねないのである。

私は Whitman の弱点の一つは、このような彼自身の論理の欠除というか、民主主義の若さというか、あるいはそれが必然的に伴う異質のものの混在についての認識の不徹底という一面を見落してはならないような気がするのである。

Columbus 像に現われた Whitman の個人が真に彼自身であったか、まだ彼自身になりきれなかったかについては批評も一致しないところがあるにせよ、個人であることが弱さと結びついているということだけは言えると思う。弱さということに価値がないわけではないことも言い添えておきたいことではあるが。

常識という言葉は何度も使ったが、Granville Hicks のような進歩的な批評家は当然 Whitman を賞揚するけれども、彼は Emerson 的な教えが結局はモルガン、ロックフェラー、カーネギー等を正当化した事実をあげている。⁴¹⁾

もしているのであるが、「しかし、それにしても」という意外感は幾度かくり返して生じざるをえない。やはり掴み難い作家ではある。

忍耐強い蜘蛛は自分の体の中から糸を繰り出し続ける。(“It launch'd forth filament, filament, filament, out of itself.”) それはこの上なく孤独な、伝統から遠去かった姿ではないか。自分自身から出発することと、次に創り出す家庭から出発することとのあいだには実に大きい隔たりがあろう。家庭を文化の基盤と考えたのは保守的伝統主義者 Eliot ではあったが——“Passage to India” が哲学的で抽象的でありすぎるといふ欠点を指摘した Pearce は、詩の動きと音が、そのために、詩人によって十分に制御されていないという貴重な指摘をすると同時に、その思想はまだ十分に Whitman のものになっていないこと、自我が時として自己を見失い、自己を統御しかねていること、それが讃えている世界は自己の作り出したものではない (celebrates a world it never made) ことから、(Poe もそうだが) 己れを空しくすることも、世界が自分に降服するように要求することもできない、それは詩に対して能力以上のものを求めることであり、詩人であることへの罪の許しを乞うているにすぎない、その結果として残されるのは「冷淡な詩、混乱した宗教、そしてまずい (bad) 哲学」であるというのである。³⁸⁾ Lewis の言う self-identification は実現されていないことになるのである。広般な読書をしたにも拘わらず、本当の意味での広い知識と自己訓練（それは「正統」とか「伝統」という言葉に包摂される）から絶たれていたことを持ち出す点では他の批評家と変りはないが、この限界と弱点の自覚が仰々しい神秘主義と過度の Personalism から彼を守ったこと、彼は世界が自我の概念に目覚め、少なくともそれを許すこと、reality は詩のものではないという態度をすててくれることを求めたことを強調する。つまりそれが Whitman の強さの源泉であるとしていることは、結局のところ詩人を非常に高く評価しているのである。詩に対して無理解な時代の文化の弱みの中から強さを得て来たこと (“...the miracle of the achieved poetic act is that by imaginative transformation it can derive its characteristic strength from the characteristic weakness of the culture in which it is performed.”³⁹⁾) の主張は、その着眼の特異さからも、

が、並置されてこの詩集の探求の旅を構成することを指摘する。³⁵⁾ Whitman の場合には、そこから逃れて行かねばならない悪い過去は存在しない。(“For Whitman, there was no past or ‘worse’ to progress from; he moved forward because there was nothing behind him—”³⁶⁾) 従って Whitman は「進歩の使徒」ではない、と言う Lewis の発言は再び意外な提言に思えるかもしれない。なぜなら Whitman は民主主義の擁護者であるというのが我々の常識なのだから。若く世を去った Crane は別として、Whitman の若い頃と後年とのあいだに何か大きな違いがあるのではないかと考えたくなるが、前記 Lewis の指摘は「少なくとも若い頃の Whitman」がそうであったこと、そして強いて意識せずに飛躍できたことについて述べているに過ぎず、続いて、後年の詩では「骨を折りつつ」苦心して「天地の秘密」に帰る、と評しているのである。Lewis としては別に矛盾は無いということになるであろうし、“Prayer of Columbus もその程度の悲哀感しか感じなくても良いことになりかねない。

それにしても Whitman はあまりにも伝統という論理的世界から遠く、innocent でありすぎる。新しい Adam にあるのはただ“open road”のみである。自己の否定と拒否に始まる伝統的神秘主義の辿りつく砂漠と沈黙は彼には結局ないのだろうか。Lynen は彼が Hawthorne や Emerson と違って、清教徒的伝統から直接出て来ているわけでないこと、Poe や Melville と異なり、制度化された図書館、教会、教室が心を圧迫することのない環境に育ったことを重視して、それが Whitman をはじめとするアメリカ文学の symbolism の特性に関係があると言おうとするが、³⁷⁾ 結果として、たとえば彼が独自の直観と心的傾向から彼らしいシンボルの文学を創ったとしても、そこには何か弱点と言えるものが出ているのではないかと思うのである。少なくともアイロニーとパラドックスがないという浪漫主義の評価では、20年代の読者は健全であったようだ。

呼ばれる声と神の存在のみが reality のすべてである沈黙の荒野は“Passage to India”や“Prayer of Columbus”ではないのであろうか。これまでに参照した批評家たちは、何とかして彼の詩を合理的に理解しようとして成功

progression dramatizes, in an important degree, the development of the experience it describes.”³³⁾ 前提として述べたように、このことは、本質的には、20世紀の romanticist である Hart Crane にも当てはまることなのである。Lewis は、Whitman に関してであるが、これを “the act of differentiation and self-identification”³⁴⁾ と言う。(Crane における「自己放棄」と「自己充足」とが、physical manifestation of a spiritual goal の方法であったことを想起せよ。) Whitman (Adam) と Crane (Columbus) が、「悲しみ」と「分裂」を超克する道もそこにあった。原初に還って出発することと、過去をさか上ることとの微妙な相違はあっても、現在を unreal なものとした Poe に較べれば、二人はやはり近いところにいたと言わねばならない。そして原罪のゆえに放浪する者の Hawthorne=Melville 的世界よりは、*To a God Unknown* における Steinbeck の patriarch の世界に近いと言うべきであろう。特に Whitman の catalog-style は、万物に名を与える造物主の機能を果してさえいるのである。

文体について言えば、勿論 Crane と Whitman には非常な相違がある。Crane はむしろ Keats に近いであろう。後の二人は家族の問題を抱え、金銭的に悩み、詩的名声の成就を確かめずして若死にした。海の描写については、三者共に概して荒れ狂う海よりは静かな海を好んだ——Whitman は悲劇的でないが故に、Keats は幸福がそこはかかない夢幻の弱々しい果敢ない危険の中にあると感じたが故に、Crane は Keats と同じく危機をうたいつつも、潮位が反覆変化するなかで死が超克されるという恩寵を見出したが故に。Keats と、さらにもっと分裂的な現代という悪条件を担った Crane は、uncertainty の中で “happy pain” の境位に住した。(Ode 時代の Keats は luxurious sorrowfulness に沈潜した。)

Cane の *The Bridge* の序詩 “Proem” と “Ave Maria” には、Columbus の 15 世紀的宗教と 20 世紀の「機械時代」の産み出した新しい観念が共存する。Lewis は有名な Henry Adams の悩んだ「聖処女」と「発動機」という融け合わない二つのイメージの問題 (Adams はマリアにも女性という「性」があることから dynamo の「力」に結びつけて、そのような調和を 13 世紀に見出した)

It launch'd forth filament, filament, filament, out of itself,
Ever unreeling them, ever tirelessly speeding them.²⁷⁾

Crane はむしろ歴史を逆に「帰って」行くのであるが、Whitman は「始める」ために帰るのである。Lewis の “In the early poems Whitman accomplished the epochal return by huge and almost unconscious leaps. In later poems he worked his way more painstakingly up the river of history to its source.”²⁸⁾ という指摘は正しいであろう。そして、いずれにしても、詩人は究極の chaos へと戻るのである。（“O secret of the earth and sky!”²⁹⁾ Lewis としても、そのとき「悲しみ」があるであろうことを否定するものではない。（“...he succeeds...in presenting the dream of the new Adam—along with his sorrows.”³⁰⁾）しかし、Lewis の Adam としての Whitman 像は、追放された Adam でなく、まだ楽園にいる Adam である。

Whitman の romantic で transcendental な傾向は、しばしば我々の常識を逸脱して、矛盾にみちた大言壮語になるとの印象を与えがちであるが、原初に還った Whitman は、彼自身 Adam になりきっているのであり、それが Lewis のいう innocence そのものという意味でなければならない。Lynen の同情的批評も、その点で Lewis と一致していると言えるようである。Lynen は Whitman が、たとえば “Starting from Paumanock” の第 2 節で、“Victory, union, faith, identity, time” と言うとき、人は彼の victory, union, faith の代りに、むしろ “disorder, carelessness, and vaporish emotion” を想起することを指摘すると同時に、前三者はまさにその時の詩人の心に思想として現在するものであって、(imprecision どころでなく) 実に正確な自己観察であることを弁護する。³¹⁾ 空間と時間のひろがり横切って旅するその自由さは、“generalization” に向ってのものであり、同時にそれは「現在の瞬間」の “realization” である。“What the idea asserts *about* reality is true and meaningful only in that it is the thought he is now having.”³²⁾ 語り手としての詩人と登場人物としての詩人が接近し、詩の進行と共にそこには詩人の経験そのものが展開される所以である。（“...the poem's

る詩²¹⁾の中の本の一木の樹木の姿に注目したい。詩人は“rude, unbending, lusty”なその樹が自分に似ていることに気づき、近くに友人もいないのに独りで立って、喜ばしげに深緑の葉をざわめかしている理由をいぶかしがる。それは“manly love”の象徴だからだと自分に言いきかせるが、やはり自分には出来ないことだと悟るのである。“Solitary in a wide flat space”, そして“without a friend a lover near”という状態は、必ずしも悲劇的ではないにしても、詩人の魂をゆさぶる。それは人間の原初の姿だからである。老齡と過去はそのとき太古に帰り、「孤独」は若い人類の祖の本質となる。

Lewis はこのような“simple, elemental loneliness”こそが Whitman の感情の中で優勢を占めていたと論じるのであるが、さらに進んでそれはアメリカ文学の中心的主題であると主張する。²²⁾ Adam は隠者 (anchorite) などとは比較にならないほど孤独であったから、当然悲しみを覚える時もあったろうが、自然に対する敵意とか、衝突し合う諸勢力は感じなかったであろう。“Whitman was wistful, not tragic. We might almost say that he was wistful because he was not tragic. He was innocence personified.”²³⁾ 19世紀と20世紀の違いがそこにあるであろうが、やはり Whitman の天性を Adam と較べるのは Lewis の卓見である。

Crane は融合しない対立の中で翻弄されて、「結合」のアメリカ的神話を客観的な叙事詩の倫理体系に完成させたいと願った。Whitman は燃え上りながら全てを取りこむ新しい詩の到来を疑わなかった。Whitman が時として沈静することはあっても、メキシコ湾に飛びこむような破滅を生きたのは Crane の方であった。Whitman, a cosmos は“I accept Reality and dare not question it”²⁴⁾と豪語し、“I, chanter of pains and joys”²⁵⁾と自称する。彼は Adam のように (“I, chanter of Adamic songs/Through the new garden the West, the great cities calling”²⁶⁾), 自から生まれ (自己との情事), 自己を形成し, 伴侶を求め, 家庭を作り, 種族へと発展する。それは野の樹とある意味で似通う, 一匹の蜘蛛の旧約聖書的族長の姿である。

A noiseless patient spider,
I mark'd where on a little promontory it stood isolated
Mark'd how to explore the vacant vast surrounding,

O farther farther sail!

O daring joy, but safe! are they not all the seas of God?

O farther, farther, farther sail!(9)

ところが Whitman には、もう一つ Columbus を主題とした “Prayer of Columbus” という詩がある。ここでは “Passage to India” の Columbus と打って変わった、老いさらばえた孤独な一人の人間の、静かではあるが沈痛な祈りの姿が描かれる。しかもそれは冒頭の部分からしてそうである。

A batter'd wreck'd old man,
Thrown on this savage shore, far, far from home,
Pent by the sea and dark rebellious brows, twelve dreary montns,
Sore, stiff with many toils, sicken'd and nigh to death,
I take my way along the island's edge,
Venting a heavy heart.

彼は心身共に疲れはてた。

I am too full of woe!

Haply I may not live another day;

I cannot rest O God, I cannot eat or drink or sleep,

Till I put forth myself, my prayer, once more to Thee,

Breathe, bathe myself once more in Thee, commune with Thee,

Report myself once more to Thee.¹⁹⁾

彼はクウェーカー教徒ではあったが、いわゆる正統的なクリスチャンとは言い難い点も多いが故に、この詩は意外な強さで訴えるものを持っている。“What the Thunder Said” の Eliot もこれをすでに読んでいたものであろうか。

“Here one can neither stand nor lie nor sit/There is not even silence in the mountains/But dry sterile thunder without rain/There is not even solitude in the mountains”²⁰⁾

老齢と孤独という意外な姿を Whitman は見せている。アメリカ的な浪漫主義は独立革命の成功という歴史を踏まえて、欧州や英国における無力感や幻滅感と異なったものがあつた筈であるし、Crane の Whitman 讃仰も、20世紀から眺めたとき、まことに得難い希望にみちた導きとして映つた結果なのであつた。

“I saw in Louisiana a live-oak growing,/All alone stood it” に始ま

Crane もまた旧約聖書的なニュアンスをもってうたう。

This disposition that thy night relates
From Moon to Saturn in one sapphire wheel:
The orbic wake of thy once whirling feet,
Elohim, still I hear thy sounding heel!¹⁷⁾

二人の前にはさらに Emerson のいたことを考えねばならないのであるが、円い眼から生まれる円形の連想は、眼の捉える水平線をはじめとして、無限に立ち現われる世界ないし宇宙を表現する “the highest emblem” と言えるであろう。この「自然の円形」は神のしるしでもある。Crane の Columbus にとっても、眼は単に物を見るにとどまらず、絶えざる運動、回転する円形を構成する (“accrete—enclose”)。

Crane の Columbus の旅は、Whitman の Columbus と反対に、帰りの旅であることは前にもふれたが、Crane には「取り返す」とか「帰る」のイメージが多い。“Ave Maria” にもいくつも見受けられる。“I bring you back Cathay!” “O Madre Maria, still/One ship of these thou grantest safe returning...”¹⁸⁾ このように “return” とか “take back” とかに類する表現の多いことから、Crane の aspiration と uncertainty の同時的存在の状態を感じるものであり、John Keats への理解の深さもよく解ると言えるし、彼個人と時代の confusion, conflict を想わせられるのである。

それでは Whitman は、Crane と異なり、始終若々しい力に溢れていたものであろうか。T. S. Eliot の *The Waste Land* の pessimism (と Crane は受けとった) を克服するために Crane が向っていった Whitman であるが、疲れていたのは Columbus だけでなく、実は Whitman も疲れていたのではないか。またそのような反対概念も包含しないことには Whitman の世界らしいと言えないであろう。

...unloving earth, without a throb to answer ours,
Cold earth, the place of graves.(5)
And who art thou sad shade?(6)

しかし Columbus は再び勇気を振りおこして前進する。

O brave soul!

い運命となるであろう。¹¹⁾

Whitman が Columbus を主人公にしたのは勿論 “Passage to India” である。というよりも Columbus の独白から成っていることと、Columbus が詩人その人であるということでは Crane の場合と同じであるが、むしろ「印度への航路」そのものが主人公であると言うべきであろう。Passage は即ち前進、移動、結合の行動、新しい文学 (“the true son of God, the poet”) への期待であり、物理的次元を超える。 (“Passage to more than India!”)

Whitman と Crane では「航路」の方向は同じではないことに注目しなければならぬのであるが、第3節の

Bridging the three or four thousand miles of land travel,
Tying the Eastern to the Western sea,
The road between Europe and Asia.¹²⁾

をはじめとする共通の主題は、二人の詩人の近い関係を明らかに示している。

R.W.B. Lewis は決定的な相互関係を “rondure” という語の使用から推察する。¹³⁾

—till eyes

Starved wide on blackened tides, accrete—enclose
This turning rondure whole, this crescent ring
Sun-cusped and zoned with modulated fire
Like pearls that whisper through the Doge's hands¹⁴⁾

「この回転する円形の世界」は “Passage to India” の第4節の末行 “Thou rondure of the world at last accomplish'd” および第5節第1行 “O vast Rondure, swimming in peace”¹⁵⁾ の反響であることは容易に肯けるところである。詩としてはそれほど魅力的な表現とは言えなくても、“Ave Maria” の Columbus と、Crane の詩人観とに通じるものがそこにある。第6節を見よう。

Gigantic, visionary, thyself a visionary,
With majestic limbs and pious beaming eyes,
Spreading around with every look of thine a golden world,
Enhuing it with gorgeous hues.¹⁶⁾

「発見の航海」——未知のものの探求が、勇気と信仰によって支えられていることを見出している。これによってアメリカ的経験の両極性に橋がかけられ、各両端そのものはまた絶対へと通じる橋となって一体化する。Columbus の旅の主要な動機は精神的なものであり、より高い人間的経験と、人間精神を成就達成するための新しい純粋な出発とへの希望が、財貨への欲望よりもさらに深まっている。（“—Yet no delirium of jewels!...Rush down the plenitude, and you shall see/Isaiah counting famine on this lee!”⁶⁾）彼の努力を支える勇気は、神の助けを信ずるところから生まれる。⁷⁾

詩は Columbus の独白の形式で進められ、彼がアメリカを発見したあと、成功を報せるべくスペインに向って帰るところである。嵐が来て、自分の業績が知られないうちに死ぬのではないかと恐れ、彼は祈りつつ経験をふりかえる。自分のやったことは途方もない意味があった。彼は Cathay を発見した。人々は懐疑的だったが、遂に the Chan's great continent に辿りついた。カーンは神を暗示し、キャセイは充足の土地である。⁸⁾

大陸を発見する前の晩、「恐怖ではない信念の波にさらわれあやうく分別を失うところだった。」“For this victory a difficult combination of confidence and humility was demanded: confidence, to overcome doubt; humility, to submit to the will of God.”⁹⁾ 矛盾する「確信」と「謙譲」を通じて、神の支配と、厳しい自己鍛錬による精神的進歩との肯定が生れる。自己放棄 (self-abnegation) と自己充足 (self-fulfillment) との途が、未知への旅の内面的意味である。新世界の価値は、その精神的目標の physical manifestation の中にある。

still one shore beyond desire
The sea's green crying towers a-sway, Beyond
And kingdoms
naked in the
trembling heart—
Te Deum laudamus
O Thou Hand of Fire¹⁰⁾

旧世界から新世界への航路は “the passage of the soul to God” のシンボルであり、“a spiritual Cathay” の光輝を維持することがアメリカの輝やかし

and indiscriminate enthusiasm are somewhat beside the point.”¹⁾と手
きびしく（いささか自分のことは忘れたきらいはあるが）こきおろしている。
Elizabeth Browning, Tennyson, Thompson, Chatterton, Byron, Moore,
Milton は嫌いだが、自分はだいたい “catholic admirations” を抱く人間で、
“I *do* run joyfully towards Messrs. Poe, Whitman, Shakespeare,
Keats, Shelley, Coleridge, John Donne !!!, John Webster !!!, Marlowe,
Baudelaire, Laforgue, Dante, Cavalcanti, Li Po, and a host of others.”²⁾
と言うなかに Whitman をたしかに入れてはいるのであるが、これは 1921 年
の手紙であり、Pound や Eliot の認可した詩人の名が多く並んだものとなっ
ている。Leibowitz の注目するのは、この中に Shelley と Whitman, Keats
と Coleridge があげられていることである。なぜなら当時としては世人が眉を
ひそめる、個人的な表現にみちた “serious Romanticism” を、Crane が選
んだわけであり、それは “Romantic interior decorating, imprecision,
transcendentalism, lack of irony and paradox”³⁾ という欠陥を含むもの
と考えられて、趣味の基準から除外されることが普通だったからである。結局
Crane に対する Whitman の影響を否定することは misleading であるが、
Whitman は “considerably less important than Marlowe, Webster,
Eliot, and Pound, among other poets”⁴⁾ という Leibowitz の線が妥当な
ところであろう。Lynen の意見もこのことを一般的に裏書きしていると思われ
るので、つけ加えておこう。

Considering his achievement, his influence upon later American writers is remarkably slight. Ezra Pound, Hart Crane, and William Carlos Williams acknowledged a debt to him, and in *Four Quartets* the recollections of *Leaves of Grass* are extensive and subtly pertinent, but only special pleading could make a case for the thesis that Whitman is a primary source of modern American poetry.⁵⁾

ところで Hart Crane が Columbus を中心人物としたのは詩集 *The Bridge* の序詩で、アメリカの spiritual future とのつながりのシンボルとして Brooklyn Bridge に呼びかけたあと、次の最初の詩 “Ave Maria” においてである。視点はアメリカという国の誕生に移される。ここで詩人は Columbus の

Hart Crane と Walt Whitman の Columbus

福 間 欣 一

Hart Crane (1899—1932) がアメリカの神話を (必らずしも得意でない) 叙事詩として完成しようとするとき、Columbus が登場することはきわめて自然のことに思えるのであるが、偉大なる romantic poet として、また特にアメリカの先輩詩人として Crane が師と仰いだ Walt Whitman (1819—92) もまた Columbus を主題とする詩を書いていたことは、アメリカの浪漫主義の系譜の中における影響関係のみならず、その主題の可能な意味を考えるならば、それはごく当然な必然性を持っていたと一応言えそうである。

Christopher Columbus (1446?—1506) という歴史的人物は客観的には唯一人の存在であって、事実の一つしか無い筈であるが、しかし、二人の詩人の浪漫的性格は自らの主観と個性を登場人物に反映させざるをえなかったし、多くの共通点にも拘わらず、我々の感得する別個の Columbus 像は、この難解なアメリカ詩人たちを理解するための一つの手掛かりにはなると思うのである。

新旧両大陸を結ぶこと、東と西の握手、その他多くの異種のものとの結合のシンボルとして Columbus を認めることも、Crane の Whitman から受けた影響の一つであり、前者が全面的に後者の影響を受けていたであろうという推測は広く行なわれるところである。しかし事実は必らずしもそうではなく、影響を受けると同時に反撥もし、Whitman 以外の詩人の存在も案外に大きかったという、平凡な常識もまた必要なのである。(Whitman は生誕百年を迎えるまでそれほど注目されなかったことも事実のようである。)

1930年に書いた“Modern Poetry”というエッセイの中では、“The most typical and valid expression of American *psychosis* seems to me still to be found in Whitman. His faults as a technician and his clumsy